

# 日本オーステイン協会第19回大会プログラム

---

- 日 時： 2026年6月20日（土） 受付 10:30より
  - 場 所： 大阪大学豊中キャンパス 法経講義棟1階 法第2番講義室  
（〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-6）  
※ 阪急電車宝塚線 石橋阪大前駅（特急・急行停車）下車 東へ徒歩約15分  
大阪モノレール 柴原阪大前駅下車 徒歩約10分  
※大学ホームページ（<https://www.ris.ac.jp/access/index.html>）ご参照のこと。
  - 参加費： 日本オーステイン協会会員：無料  
当日会員（上記会員以外）：一般1,000円、学生500円（当日受付で支払い）
- 

- ◆ 開会の辞（11:00～11:05）  
鈴木 美津子（日本オーステイン協会会長・東北大学名誉教授）
- ◆ 研究発表  
発表①（11:10～11:55）  
司 会： 坂本 武（関西大学名誉教授）  
発 表： 土方 雅子（慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻 博士1年）  
「Northanger Abbeyにおけるhumourの機能—読者の批判的判断力の形成—」  
発表②（11:55～12:40）  
司 会： 高桑 晴子（お茶の水女子大学教授）  
発 表： 飯田 咲希（立教大学大学院文学研究科英米文学専攻 博士1年）  
“Management of Land in *The Absentee*”
- ◆ 総会（13:30～14:00）
- ◆ シンポジウム（14:00～16:00）  
「日本オーステイン協会 これまでの20年、これからの20年」  
パネリスト： 向井 秀忠（兼司会、フェリス女学院大学教授）  
新野 緑（ノートルダム清心女子大学教授、神戸市外国語大学名誉教授）  
小川 公代（上智大学教授）  
畑中 杏美（弘前大学准教授）
- ◆ 特別講演（16:15～17:30）  
講師： Michael Kramp（Professor of English at Lehigh University, USA）  
“Emma and the Challenges of Living in Community”  
司会： 島崎 はつよ（Independent Scholar at the University of Southampton）
- ◆ 閉会の辞（17:30～17:35）  
三馬 志伸（英文学者、翻訳家）
- ◆ 懇親会（17:50～19:50）  
カフェテリアらふおれ（大学内レストラン）

問合せ先： 日本オーステイン協会事務局  
〒790-8578 松山市文京町4-2 松山大学新井研究室内  
E-mail: [harai@g.matsuyama-u.ac.jp](mailto:harai@g.matsuyama-u.ac.jp)

*Northanger Abbey* における humour の機能 —読者の批判的判断力の形成—

土方雅子（慶應義塾大学大学院文学研究科英米文学専攻 博士1年）

Jane Austen の死後に出版された *Northanger Abbey* は、彼女が作品を執筆していた時代に流行したゴシック小説の誇張をパロディ化した作品として読まれてきた。しかし本作は、読者の想像力を単に風刺して否定するのではなく、経験と観察を通して批判的判断力の形成を促す作品として、18世紀末の啓蒙思想の文脈から読むことができる。本発表では、主人公 Catherine Morland がゴシック小説に夢中になる過程で形成される判断力に着目し、作品において humour が批判的判断を促す役割を明らかにすることを目的とする。さらに、語り手による当時の読書文化に対する風刺と「taste」の概念が、読者に批判的判断を実践させる機会を提供していることを論じる。

物語の中で、Catherine は Ann Radcliffe の *The Mysteries of Udolpho* に夢中になる。彼女はゴシック小説を通じて強い想像力を働かせるが、その結果、周囲の人物や出来事をゴシック的な文脈で解釈してしまう場面が多く描かれている。特に *Northanger Abbey* での滞在中、古い家具を恐怖の象徴とみなし、General Tilney を悪者とみなしてしまう。しかし、これらの誤解は道徳的な失敗として扱われるのではなく、経験不足と読書への没入の自然な結果として描かれている。Henry Tilney との対話や日常的観察を通じて、Catherine は想像力と批判的判断力のバランスを学び、蓋然性の判断や社会的文脈を理解していく。この過程は、18世紀啓蒙思想の理論、David Hume の probability 論や Adam Smith の impartial spectator の概念に通じ、読者も Catherine の判断を評価する立場に置かれる。こうして Austen の humour は想像力を否定するのではなく、むしろ読者が独立した判断をする機会として機能している。

次に、語り手による文学的権威の風刺は、作品における重要な humour の一形態として位置付けられる。語り手は当時の文学階層や、Joseph Addison の *The Spectator* に代表される権威的テキストを批判し、小説を読むことを恥ずかしがる文化を静かに笑うと同時に、内容ではなく権威ある名前に価値を置く文化を風刺している。本発表では、この風刺が読者に自ら判断する余地を与えている点に着目する。ここで重要となるのが「taste」の概念である。18世紀において taste とは単なる美的センスではなく、経験と比較に基づいて何が適切で、調和が取れているかを判断する能力を意味していた。語り手は、読者がその力を使って、作品の価値を自ら判断することを促している。Austen 自身も手紙の中で、小説を軽視する社会に不満を示している。この姿勢は、読者の独立した判断を重視する立場を反映している。また、Austen は過去の著名な作家、例えば Samuel Johnson や Joseph Addison の作品を尊敬しつつ、単なる模倣にはとどまらない。手紙の中で Austen は、Dr. Johnson と同様に事実の記述よりも思考を重視する態度を示している。この姿勢は、同じ理念を共有しつつも、独自の判断のあり方を示している。これは、観察や経験に基づく独立した評価を重んじる、啓蒙思想の精神に通じている。語り手の皮肉や自意識は、読者が文学の権威や慣習を鵜呑みにせず、自分で判断することを促している。

さらに、Catherine のゴシック小説への没入による過剰な想像力の具体例は、humour が単なる笑いではなく、批判的判断力の形成を促す装置であることを示す。窓や家具を怪奇に見立てたり、General Tilney をゴシック小説の悪役と誤認したりする彼女の想像は、最終的に Henry の指摘と現実社会との照合を通じて修正される。この過程を通じて、読者もまた観察・評価・批判的判断を行うことになる。ゴシック小説の想像力を喚起する性質を保ちながら、啓蒙思想的態度である内省的な判断力の形成へと結びつけている点に特徴がある。

本研究は、*Northanger Abbey* における humour が、Catherine の経験を通して批判的判断力を育む装置として機能することを提示する。語り手の皮肉やコメントは、読者に自律的な評価の場を提供し、道徳的・社会的判断を促すきっかけとなる。この観点から、Austen の humour は単なる文体的特徴ではなく、読者の道徳的判断を形成する文学的装

置として理解される。本研究は *humour* を読者の批判的判断力の形成という観点から *Northanger Abbey* を捉え直す点に新しさがある。

### Management of Land in *The Absentee*

飯田咲希（立教大学大学院文学研究科英米文学専攻 博士1年）

本発表では Maria Edgeworth によって執筆された *The Absentee* (1812) における土地の管理というテーマに関して、アイルランドの土地がいかに適切に管理されうるのかという点について論じる。本作品は 18—19 世紀にかけて特に問題視されていたアイルランドの不在地主というトピックを取り上げたものである。長い時間をかけてアイルランドの土地の大部分を所有するようになったアングロ・アイリッシュの地主の中で、1801 年の Act of Union 締結後、実際にアイルランドを在地で管理するのではなくロンドンなどの遠隔地に住まい、土地の管理をエージェントに任せる不在地主が多く生まれることとなったが、この管理体制は様々な問題を招くこととなる。農業や製造技術向上を促す団体である the Dublin Society を創設した Thomas Prior が *A List of the Absentees of Ireland, and the Yearly Value of their Estates and Incomes Spent Abroad* (1730) の中でも指摘しているように、エージェントによる不適切な管理方法とそれに伴う土地の荒廃や、不在地主たちが収入をアイルランド外で消費することによる資産の流出が起きるようになった。*The Absentee* はこのような当時のアイルランドの社会問題を反映した作品である。アングロ・アイリッシュの地主一家の次期当主である主人公 Lord Colambre が不在地主となっている父に代わり、荒廃した土地と社会秩序の改善を果たす。エッジワースもまた 1580 年代にアイルランドに植民したアングロ・アイリッシュの家系に生まれ、父がイングランド暮らしを切り上げてアイルランドの地所に移り住んだ際に、家族とともにイングランドからアイルランドに移った経歴を持つ人物である。1798 年以降に深化したイングランドとアイルランドの政治的軋轢を目の当たりにしたこと、さらに *The Absentee* 以外にもアイルランドを描いた *Castle Rackrent* (1800) や *Ennui* (1809) が出版されていることから、作者がアングロ・アイリッシュによるアイルランドの土地管理に深い関心を抱いていたことが分かる。

作品において適切な土地管理に必要な要素として不在地主制度の撤廃、つまりアングロ・アイリッシュの地主による在り地管理の必要性が提示される。アングロ・アイリッシュによる在り地管理を推奨することの問題として、イングランドが支配者としてアイルランドを支配するという植民地体制の維持につながるという懸念が挙げられる。エッジワースの本則においては、アイルランド人がアングロ・アイリッシュによる支配体制を転換させるような急進的な動きを取ることはない。そのため、エッジワースの提示する安定的な支配はアングロ・アイリッシュ/アイリッシュという支配体制の維持に貢献してしまうこととなる。しかし、アイルランド人がイングランドから完全な自律性を獲得することの限界を暗示しつつ、本作品が代わりに示すのはアングロ・アイリッシュの人びととアイルランド人の共存である。地主が適切な土地管理を実行して安定的な生活を保障し、アイルランド人たちがアングロ・アイリッシュによる土地の統治を承認するという、所有 - 被所有の関係を前提とした相互補助の可能性が示されていると言える。そのため、この作品はアングロ・アイリッシュがアイルランドの再発見を果たし、アイルランドへの理解を深めていくことを土地管理というテーマにおいて重要な点として描いている。

アイルランド人はそれまでアングロ・アイリッシュやイングランド人によって文化的・社会的に劣った存在としてステレオタイプ化されてきた。しかし、*The Absentee* においてコロンバはアイルランドの土地に住まう人々の生活の実情を学び、アイルランド社会への理解を深めてゆくこととなる。コロンバはアイルランドをイングランドよりも社会的・文化的に劣った場所として捉えたり、イングランド人の文化や社会システムを導入して「改善」すべき場所として見たりするのではなく、アイルランドの土地の所有 - 被所有の枠組みの中で共存してゆくべき相手として見ることを学ぶのである。特に両親の Lord Clonbrony 夫妻と自分の家族財産を管理するエージェントたちと出会う中で、

コロンバは悪徳なエージェントの存在を知り、不在地主制度の欠陥を認識する。その上で、Mr Burke というコロンバの土地を管理するアイルランド人の善良なエージェントによるテナント農家との友好的関係、インフラの整備、教育機関の設立といった社会制度の拡充を見ることで、アングロ・アイリッシュ地主層の一員として土地管理の改善に貢献できる可能性を見出す。コロンバがアイルランドを周る中で、アイルランドの土地を管理する支配者的立場に立ってイングランドのシステムをアイルランドに啓蒙するというよりも、彼自身がさまざまなキャラクターとの交流を経て、アイルランド社会を知るという学びの場となっている。そこで得た学びを基に、コロンバはアングロ・アイリッシュの土地相続者としてアイルランドの土地管理を改善するヴィジョンを得てゆく。さらにコロンバと彼の両親がアイルランドに帰還することにより地主不在の間に崩壊した法的秩序の建て直しを行い、土地に住む人々に生活の安定と安全を与える。それに対し、アイルランド人のテナントたちが地主の存在を承認することにより、アングロ・アイリッシュが所有する土地の管理をめぐる地主とテナントの関係がより良好になるというのが本作のハッピーエンディングである。以上のように *The Absentee* は小説出版当時のアイルランドの不在地主の様相を詳細に描きながら、アイルランドの土地管理に関わる問題を改善する方策をアングロ・アイリッシュの地主とアイルランド人のテナントたちの相互協力に見出すことがこの作品におけるエッジワースの戦略であったと結論付ける。(英語による発表)

#### 【シンポジウム概要】

日本オースティン協会：これまでの20年、これからの20年

パネリスト 向井秀忠 (兼司会、フェリス女学院大学教授)  
新野 緑 (ノートルダム清心女子大学教授、  
神戸市外国語大学名誉教授)  
小川公代 (上智大学教授)  
畑中杏美 (弘前大学准教授)

近年、日本の大学における「英文学科」は大幅に数や志願者数を減らし、多くの私立大学はその状況に合わせた対応を行ってきた。これは、文学中心の伝統的な学びから、実用的な英語力や国際感覚を重視する分野に社会の関心が向けられているからだとされる。先日、文部科学省が2040年度までに大学進学者数が約12万人減少(50万人台)すると試算、大学の規模適正化(定員削減)を求めるとの発表もあり、これから先も「英文学科」受難の時代が深刻になっていくだろうと予想されている。

こうなってしまった原因のひとつには、英文学科が自ら簡単に世情に合わせようとしたことがあると考える。英語圏の文学作品などを研究することの意義(文化を通して社会を学ぶこと)を強調せず、むしろ「英語が学べる」という実用的な側面をいたずらに宣伝してきたことである。そもそも、「英文学」を学ぶことは「英語」を学ぶことではないにもかかわらず、本来の学問的意義を社会に対して十分に発信せず、どのように社会に貢献しているのか、その社会的な意義が十分に世間に伝わらなかったため浸透しなかったことが、現在の逆風の一因につながっているのではないだろうか。

アメリカの作家カート・ヴォネガットは「炭坑のカナリヤ理論」と称し、「芸術家」の社会的な役割は、一般の人びとが気づかない社会の問題をいち早く指摘し、その危機を訴えていくことにあるとしている。現在の社会を見たときに、なぜ、ロシアのウクライナ侵攻やイスラエルによるガザ攻撃が、アメリカの暴君的な世界支配の意思が非道徳的なのか、そしてこれらと同じような問題を世間に伝えていくという重要な役割が「英文学」にもあるのだろうと考えられる。今の社会において「文学」はそのような役割を果たすことができているのだろうか。

現在の社会の特徴として次のことが考えられる。過度な効率重視の偏重（コスパやタイパ、わかりやすく、すぐに役に立つことにしか興味がない）、反知性主義的風潮（専門家やインテリへの嫌悪）、そして、これらを支えている社会全体の幼稚化（政府による人文教育の軽視）。私たちは、明らかに、「健全な市民」（＝自分で調べ、考え、決断し、行動できる）ではなく、「大衆」（＝自分で調べることはせず、何も考えず、簡単に雰囲気流されてしまう）に墮してしまっている。「文学」には、物語を通して、「健全な市民」に必要な思考を社会全体に浸透させる役割を果たすことができるのではないか。「文学」のあるべき「社会」とのつながり方について、まずは4人が発言し、それをもとにフロアの皆さんと「文学の社会的意義」について議論する機会となることを期待しています。（文責・向井）

【特別講演要旨】

*Emma* and the Challenges of Living in Community

Michael Kramp (Professor of English at Lehigh University, USA)

Jane Austen's *Emma* (1816) revolves around the community of Highbury, a "large and populous village, almost amounting to a town." Austen's language highlights both the confined, limited scope of the novel, and the growing size of Highbury. Highbury is a community in transition, and as we read *Emma*, we learn about both the restrictions, limitations, and traditions of its people and culture as well as imminent changes that threaten to alter the community. Austen draws particular attention to the challenges (and opportunities) of living in community, including learning to appreciate new members, changing social identities, and new relations and interventions. This presentation is part of a larger public-facing project, *Jane Austen and the Future of the Humanities*, in which I demonstrate how Austen's fiction can help us to appreciate the importance of the humanities in diverse public spaces.